

情報発信者としてのメディアリテラシーを育む取り組み —トレーラー制作を通じて—

1、はじめに

現行の学習指導要領では、情報の扱い方に関する指導の改善・充実について「急速に情報化が進展する社会において、様々な媒体の中から必要な情報を取り出し、情報同士の関係を分かりやすく整理したり、発信したい情報をさまざまな手段で表現したりすることが求められている。」と指摘している。

以上のような指摘も踏まえ、本実践は、SNSなどで、いつでもだれでも情報を送受信できるようになった現代、生徒が情報の受信者としてはもちろん、発信者としてのメディアリテラシーも身につけることを目的として、中学校三年生を対象に授業を行なったものである。

2、授業実践

附属池田中学校はIB認定校であるため、国語科では25時間程度の単元を年間2つ、合計50時間程度の授業をIBのカリキュラムに基づいて行っている。本実践は、そのうちの1つの単元である。

「メディアからもたらす情報には情報の編集者の誘導が企図されていることを理解し、発信者の立場から、受け手が自身の伝えたいことをできるだけ正確に理解できるよう、受け手意識を持って情報を発信できるようになる。」ことを単元のゴールとして設定し、以下のように授業設計を行なった。

▼メディアが伝えるものについて考える

主に情報を受信する際に必要なメディア・リテラシーについて述べた三種類の文章をエキスパート活動、ジグソー活動を通じて精読し、メディアが伝える情報は編集者の誘導により作られていることを理解する。

▼映像表現について考える

映像表現の特徴という観点からメディアリテラシーについて述べた文章を読み、文字表現・言語表現と映像・画像表現の共通点と相違点について考える。

▼ニュース映像を複数視聴し、 それぞれの演出方法について比較する

同じ出来事を対象としたニュース映像を、異なる三つのTV局がどのような演出で報じているのか、その特徴をエキスパート活動、ジグソー活動を通じて理解する。そして、その特徴の違いにより、それぞれのニュースはどのように受け手に解釈されるのかを検討する。

▼魯迅「故郷」を読み、以下のような課題について考える

- (1)なぜ魯迅は「故郷」を執筆したのか
- (2)情景描写の変化の意図は何か
- (3)各登場人物が物語中に存在する意味は何か
- (4)比喩表現が意味するものは何か
- (5)「故郷」の竹内好訳と藤井省三訳、どちらの訳が魯迅の思いを広く人々に伝えられるか

▼実際の映画のトレーラーを複数視聴し、 それぞれの演出方法について比較する

三種類の映画（洋画・邦画・アニメ映画）のトレーラーを視聴し、エキスパート活動、ジグソー活動を通じて、どのような点で観客を惹きつけようとしているのかを考える。

▼「故郷」が映画化された場合、 どのようなトレーラーを制作するか考え、実際に制作する

この単元の総括的評価課題として、30秒～1分のトレーラーを制作し、クラスでトレーラー作品鑑賞会を行う。

3、成果と課題

▼成果

生徒たちは、これまでの学習でも、情報を吟味する必要性については学んできていたが、今回の単元を通じて、情報というのは意図せずとも情報発信者の意図が入ってしまうことがあり、それを理解した上で情報を精査する必要があるということや、自分が情報を発信するときには、より慎重に考えるべきだということに気づけたようである。また、文学作品を映像表現につなげることで、異なるメディア形式における表現方法の違いを実感できたようである。

《生徒の振り返りより》

(1)このユニットを通して、あなたが情報の受信者として、意識が変わったり、学んだりはどのようなことですか。

私たちが見る情報というのは、確かなものではなく、あくまで事実に対する主観のようなものだと学びました。自分がいつもの読む側では作る側になってみた時、いくらでも事実を歪ませて情報にできるのだと気づくことができました。また、それは自分が事実を曲げようという意識をしていなかったとしても、無意識のうち自分の主観で物事を書いてしまっていることわかりました。だから受信者として、見る立場として、情報に正しいとは限らないと思うことが大切だし、流されずに客観的に考え直してみることがとても大切なのだとわかりました。これからは、流されずに発信するにつれてニュースという情報だけでなく、映像という情報までがより操作できるようになってしまいます。だからいかなる時も受け身の姿勢ではなく、あくまで一視点の考え方を教えてもらったという立場ではないといけないなと思いました。

(2)このユニットを通して、あなたが情報の発信者として、意識が変わったり、学んだりはどのようなことですか。

発信者として、いかなる場合でも自分の考えや主観は出てしまうものだということを学びました。実際にトレーラーを作ってみるのを鑑賞してみても、やっぱり一人一人全く違う物に出来るのだとわかりました。そしてそれは、個人の性格がとてつもなく反映されているものだと気づきました。他人にわかりやすいように映像作りを進める中でも、どうしても「わかりやすい」の基準は自分のものになってしまっているから、性格が反映されてしまうのだと思います。でもそれが逆にいい味を出すこともあるし、それを求めている人もいます。だから、受信者の意識と、発信者の配慮が重なり合った時、初めて情報伝達というものが完成するのかなと考えました。

《生徒の活動の様子》



【↑エキスパート活動】



【↑ジグソー活動】



【↑教科書を再読し、
トレーラーの構想を練る】



【↑iPadでのトレーラー制作】

▼課題

- ・トレーラー作品において、あらすじをなぞるだけで、物語中の出来事や登場人物の言動を自分が解釈した魯迅の思い・主張に十分に繋がらなかった生徒が複数いた。トレーラーで、どのような視点からどのような思いをどの程度伝えるのか等を考えさせる仕掛けが不十分だったのではないかと考えられるので、どのような仕掛けが必要かを再考したい。また、形成的評価のフィードバックの方法も、もっと有効な手立てがないか、再検討したいと思う。
- ・評価が非常に難しかった。妥当性・信頼性のある評価のために、作品のどこから何を見とるのかを含め、ルーブリックを再検討する必要があると考える。

4、参考文献

- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』
- ・文部科学省国立教育政策研究所教育課程センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校国語』令和2年3月
- ・山田浩美「状況に生きる人間像の探究—『故郷』トレーラー制作を通して—」、中村純子・関康平編著『「探究」と「概念」で学びが変わる！中学校国語科国際バカロレアの授業づくり』2019年6月、明治図書出版株式会社